

良質の例文暗記のススメ

岡野 一也

1. はじめに

新学習指導要領において高等学校のカリキュラムにライティングが導入されて数年が経過した。その間、現場においてある変化があったと私自身感じている。それは高等学校で教えるべき文法の内容の圧縮である。

今までは、2年間でじっくり教えていた文法を1年間に縮め、2年次よりライティングを開始することになった。そして各出版社から出された教科書を見ると、文法をベースにしたものが減ったのが現状である。現場には若干の混乱があったと思う。1年次で教えた文法を2年次でさらに膨らませようとしても、適当な教科書を探し出すのが少し難しくなった。

最近の風潮で、コミュニケーションを重視しようとするのはわかる。日常会話程度だったら英会話学校のようなことをやっていけばいいのだろう。しかし、いざある程度内容のある話をしようとするとき、それだけでは困るのである。そういった場合、その人間の教育レベルまで見られてしまいかねない。そんなときに、従来の文法・構文の知識が必要になってくると思う。最近、それを軽視しているように感じってしまうのは私だけだろうか。

数年前、大学で英語論文を指導しているある先生の話を知ったことがある。「最近の高校では文法の指導をやっていないのか。あまりにも文法事項を頭に入れていない学生が多い。大学生になって英語で論文を書かせてみると、グラマーチェックだけでレポートが真っ赤になり、内容を見るところまで行かない。高校の先生方はまず学生たちに必要な文法事項をマスターさせてから、大学に入れてほしい」と。

2. BIG DIPPER Writing Courseの編集にあたって

今回、編集委員の1人として、BIG DIPPER Writing Course (以下『ディッパーW』) という教科

書を作らせていただいた。PART 1, PART 2は文法をベースにしており、PART 3では実際にパラグラフを書かせることを主眼としている。

今までの教科書と違う点で、なおかつ我々編集委員を悩ませたのが、PART 1, 2の作り方である。各レッスンでまず左ページのトピックを決める。その後、1つのトピックに関するイラストや写真、グラフを用い、そのトピックに合う例文を載せて1つの流れがあるストーリーを作っていく。そのトピックに合うように英文を選ばなければならない。従来の文法をベースにした教科書を見ると、各レッスンで選ばれた題材が何の意味があるのか、例文を見ているうちにわからなくなってしまうのである。しかし、この『ディッパーW』は選ばれたトピックを最後まで貫くのである。例えば、PART 1の5では、文法項目は(S+V+O+C)の文型である。例文をいくつかあげてみると、He named the owl “Hedwig.” さらに、I found the Harry Potter series very interesting. というように文法事項に忠実な構文を使いながら、1ページの中で、トピックにも忠実に作られている。この点は苦勞した。例文を考えるときに、常に文法・構文に加えて語彙レベルや内容(1つのストーリー)を作っていかなければならない。しかし、この作業をしっかりとっておかないと、PART 3で学ぶパラグラフ・ライティングにつながっていかないと考えられる。

次に文法事項の説明である。限られたスペースの中でわずか数行でおさめなければならない。複雑な解説は入れることができない。そのレッスンに必要な最低限の文法説明で済まさないといけない。例えば、PART 2の23「関係代名詞 I」の解説である。

関係代名詞 who / whose / whom / that

—先行詞が人の場合

- (1) who / that : (先行詞(人) + who [that] + V) の形で使います。
- (2) whose : (先行詞(人) + whose + 名詞(+S) + V) の形で使います。
- (3) whom / that : (先行詞(人) + whom [that] + S + V) の形で使います。

上記のように簡潔に言葉を精選しなければならない。これでは大学入試等を考えると不十分ではないかとおっしゃる方もいるだろう。足りない内容は GRAMMAR というページがあり、そこでかなり詳しく解説している。

最後に EXERCISES である。まず、A の問題が簡単なリスニング問題である。B は整序問題等でいわゆる典型的な文法問題である。C では部分英作文、D では英語で表現する問題、そして最後に TRY で自分のことを英語で表現しながらまとまりのあるパラグラフを書いていくようにできている。見開き2ページの左側の説明や例文を見ながら、解ける問題である。このあたりも対象になる生徒のレベルに合わせて作られている。

3. BIG DIPPER Writing Course を用いての授業案

では、どのように授業を進めたらいいか。あくまで私の個人的な方法なので、もっとすばらしい授業形態を考えられる方もいらっしゃるだろう。

見開き2ページを1時間でこなすと考えた場合、まず左ページの導入段階で文法の説明を軽く行う。その後、KEY SENTENCES, DRILLS, ADDING VARIATIONS を音読練習を含めて、重点的に暗記させる。その際、小テストなどをあらかじめ用意しておいて覚えさせるのも1つのやり方だと思う。その小テストは空欄補充でも語群整序でも構わないと思う。これで授業の半分、または6割くらいを使う。

次に EXERCISES を行う。左ページで音読→小テストという流れを作ったのであれば、A のリスニングは後回しにして、B、C の文法問題を解かせ、解答確認をする。これはある程度短時間でスピーディに行う。その後で、A のリスニング問題を行う。

最後に D の問題で英作文を行い、TRY もやらせる

が、この D と TRY は1時間の授業内で無理に終わらせる必要はないと思う。その理由は各自で書いた英作文を次の授業でチェックすることによって前時の授業の Review となるからである。

以上が PART 1, 2 である。もしこの教科書を2年次、3年次と通して使うなら、PART 1 と 2 の途中で2年次が終わると思う。そして3年次の夏前後で PART 3 に入る。この部分は教師も生徒もかなり厳しいところである。あまり経験のないことをやるからである。PART 3 はパラグラフの説明から入って、時間の順序、比較・対照、言いかえなどが順序よく配列されているので、KEY SENTENCES の段階でしっかりと説明すれば、EXERCISES に比較的スムーズに入れるはずである。まとまったパラグラフを書く練習なので、あまり時間を気にせず、別売りの WORKBOOK などを使いながら、補充していても構わない。とにかくこの PART は、さまざまな題材で生徒に興味を持たせながら、肩の力を抜いて授業を進めていくことが望ましい。

4. 最後に

ある予備校で出版された英作文の参考書に「英作文は英借文である」という言葉が書かれているのを見たことがある。まさしくその通りだと思う。我々のような英語を母語としない者にとって、英作文は難しいのである。それは日本語と英語が数学のように1対1対応ではないからである。これは我々英語教員をかなり悩ませる。そこで「英借文」である。良質の英文を見て、それを暗記(インプット)し、そのインプットした文を別の場面で使ってみる。このことが大事なのではないか。

昨今の英語教員の中には、英語、特に英文法・英作文は暗記しなくてもよい、と生徒に自慢げに説く方もいると聞く。だが、世の中で覚えることが必要ではない学問などないと私は確信している。この『ディッパーW』のそれぞれの英文は、編集委員の先生方が厳選したものが散りばめられている。このような良い英文をしっかりと理解し、どんどん覚えていこう。そして覚えた英文をどんどん使ってみよう。それを繰り返していくことによって、「英借文」から真の Writing へとつながっていくと思う。